

2014. 12. 3 (水)

希望について

ークリスマスを前に希望の根拠を考える

(コリントの信徒への手紙Ⅱ 12:1-10)

岡田 弥生

おはようございます。先ほど打樋先生がおっしゃいましたように、教会暦では、今週の日曜からアドベント（待降節）に入っています。12月1日にクリスマスツリーの点火式に出られた方はいらっしゃいますか。開学でもさまざまなクリスマス行事が用意されています。4週間後がいよいよクリスマスです。

クリスマスと聞くと本当に、心が躍ります。9月末から秋学期のチャペルが始まりましたが、思い起こしてみると、最初は何でしたか、「孤独について」でしたね。それから「友だちについて」と、テーマが移って行って、そして最後、今月はクリスマスにちなんで「希望について」となっています。

これまで担当された先生方は、皆さんお話しされる時に、やはり研究者ですから言葉の定義から始めておられたのがすごく印象的でした。「希望」も言葉の定義を言いますと、「あることを成就させようと願望すること、また将来に良い事を期待する気持ち」というふうに『広辞苑』では書かれていました。

よく結婚式などで読まれる聖書の中に、先ほど読んでいただいた箇所と同じく、「コリントの信徒への手紙」の1の13章だと思いますが、いつまでも存続するものとして、「信仰と希望と愛」ということが、挙げられ、「一番大いなるものは愛だ」と書かれている

のですが、一番大いなるものではないにしても、3つのうちの一つが希望です。それほど希望というものは人間にとって不可欠なものだと言えると思います。考えてみましたら、この世の中で一番悲しいセリフというのは、「私にはもう希望が無い」というものではないでしょうか。

『ショーシャンクの空に』における レッドの希望の根拠とは

今回、希望というテーマで一番先に思い浮かんだのは、(キリスト教学で、打樋先生がご紹介してくださっているとお聞きしているのですが、映画でご覧になった方が多いと思います)『ショーシャンクの空に』、原題が *Rita Hayworth and Shawshank Redemption* という1982年に書かれた、スティーヴン・キング (Stephen King, 1947-) の作品の最後のレッドの言葉です。後でご紹介します。スティーヴン・キングという人はとても興味深い人で、現代アメリカ社会の根底にあるさまざまな軋轢を描いた問題作を独特の手法で次々と発表しており、映画化された作品も多くあります。よく知られているものでは『スタンド・バイ・ミー』とか『ミザリー』とか『キャリア』などです。

2010年ぐらいまで作品を発表していますから、まだ活躍中だと思います。よくモダンホラーというカテゴリーに分類されていますけれども、一説によると私の研究しているフォークナーだとか、スタインベックなどから影響を多く受けていると言われています。そのことは作品から十分読み取れると思います。

余談になりますけれども、先ほどご紹介くださった担当科目の表象文化論Cなどでも、お伝えしているのですが、アメリカ文学の大きな特徴の一つに、キリスト教の影響というものがあります。もともと、全員がピューリタンであったわけではないですけど、信仰の自由を求めて建国した国ですから、それは当たり前だと思われそうですが、どんなにキリスト教が嫌いな作家、例えばマーク・トウェインなんかそうですが、そのマーク・トウェインなどでも、母親が非常に熱心なクリスチャンであったりして、キリスト教の影響は色濃くあります。マーク・トウェインの世界にも、何でしょう、否定しても否定できないようなあるべき基準といいますが、キリスト教の世界観というのが反映されています。この『ショーシャンクの空に』も、先ほど原題を紹介しましたが、Redemptionという言葉が使われていますね、Redemptionというのは難しい言葉で言うと「あがない」です。もともとは買い取るという意味ですけども、キリスト教では、キリストの犠牲によって罪の中にある私たちがいわば神に買い取られ新しい命に生きるという意味です。

皆さんキリスト教学とかでご存じだと思うのですが、ストーリーの概略を言いますと、妻の不倫相手を殺害した容疑で、実際は無実なんですけど、投獄された銀行員のアンディー

・デュフレーションが、それこそ自由を奪われた状況下に置かれるのですが、刑務所内の人間関係を通して最後まで希望を持ち続け、ついに感動的な脱獄を果たし、それがショーシャンクでの不正を暴くことに繋がるという話です。最後、胸がすかっとなります。アンディーは20年間、ロックハンマーというすごく小さなハンマーで壁を掘り続け、その穴を題名の一部になっているリタ・ヘイワースという一世を風靡した女優さんのポスターでふさいで監視の目をごまかし続け、ついに脱獄を果たすのです。

先ほど人間関係と言いましたけれども、この中で特にレッド、(映画ではモーガンフリーマンという黒人の名優が演じているのですが)、何故レッドかということ、原作では、髪の毛が赤いからということでしたが、実はこのレッドが語り手となってこの小説は展開しているのです。レッドは二十歳の時に殺人のかどで投獄され、長年物資調達係をしており、刑務所内でかなり幅を利かせていました。

背景が全然違うレッドとアンディーの絆が感動的です。刑務所で生きるしかない和希望を捨てていたレッドはかつてアンディーに言っていました。「希望は危険である」と。しかし、アンディーはそんなレッドにハーモニカを与え、希望の大切さを教えるのです。アンディーが脱獄した後、間もなくレッドも40年の服役後、(先ほど二十歳の時に投獄されたと言いましたから)60歳を過ぎて仮出所となりますが、40年間も世間を知らなかったらどうでしょう。やはりものすごく変化している社会についていけない、現実うまく適用できないと不安を覚えておりました。唯一のレッドの望みというのは、アンデ

イーがかねて、いつか出所したら私の仕事を手伝ってほしいと、メキシコのある場所を言っていた、その言葉でした。レッドは仮出所となって、アンディーを頼りにメキシコに向かいます。不安と期待が混じった最後がいいのです。これが原作のペーパーバック版です。スティーヴン・キングの作品が春夏秋冬に分けられていて、春に「ショーシャンクの空に」が収められているのです。最後、レッドのセリフで終わっています。読んでみますと、I というのは、レッドです。“I find I'm excited, so excited I can hardly hold the pencil in my trembling hand” すごくワクワクして鉛筆も持てないほど震えているということです。少し省きまして一番最後です。“I hope Andy is down there. I hope I can make it across the border. I hope to see my friend and shake his hand. I hope the Pacific is as blue as it has been in my dreams. I hope.” 最後のhopeが強調のイタリック体で書かれています。全部レッドがこうであればいい、こうであればいいと述べているのですが、このhopeという言葉がすごく印象的です。必ず会えるとは言えないその旅に無限の希望をつないでいるレッドの姿です。“a long journey whose conclusion is uncertain”と書かれていますが、結果は不確かな旅、そこに出かけていくこのレッドの希望の根拠とは何でしょうか。それは過酷で非常に理不尽なショーシャンク刑務所での日々を目撃したアンディーの諦めない一途な姿、そのアンディーに対する信頼、それ以外にはありませんでした。

使徒パウロの希望の根拠とは

さて、今日読んでいただいた聖書の箇所は、(同じ教会に属する先生がこの場にご出席くださっていますが) 秋の特別集会で取り上げられた聖書箇所です。先ほどのショーシャンクの話でレッドがアンディーの言葉に希望を見出したように、私はこの聖書の箇所に希望をあらためて見出しました。

長い箇所でしたがパウロという人が書いたコリントにある教会に宛てた手紙の一部です。もちろん聖書は、神の靈感を受けて書かれたものであると言われてるように、単なる一個人が自分の思いを告げているというものとして読むべきではありませんが、新約聖書に27文書が収められているうちの、なんと13書簡もパウロという人が執筆したと言われています。どうして弟子でもなかったパウロという人が、そんなに多く執筆しているのでしょうか。

パウロはもともとテント職人で、生まれつきのローマ市民権保持者であり、ベニヤミン族のユダヤ人で非常に著名な学者の下で熱心に律法を学んでいました。そしてその熱心さが高じて、ユダヤ教徒の立場からキリスト教徒を迫害する立場にいました。ところが、皆さん聞いたことがおありになると思うのですが、ダマスコという場所へ行く道において、天から光と共に、(当時パウロという人はサウロと呼ばれていたのですが)「サウロ、サウロ、何故、私を迫害するのか」というイエス・キリストの声を聞きます。その直後、サウロは目が見えなくなってしまいます。しかし、アナニアというキリスト教徒が彼のために祈ると、サウロの目から、うろこのようなものが落ちて、目が見えるようになり、サウ

口は打って変わってキリスト者となるのです。

その後、ユダヤ人からは、(やはりかつて彼らを迫害をしていた人ですから)受け入れてもらうためには命まで狙われるような相当危ない目にも遭いますが、アンテオケという所を根拠として、他の協力者と共に3度も広く地中海周辺の伝道旅行をしたりして、実に熱心に布教活動を行いました。キリスト教が今日世界宗教となったのは、このパウロの力が大きいとされています。

伝承によると、皇帝ネロの時、紀元60年後半にローマで殉教したとされています。今日の箇所で、パウロは、全く我々の知りえない奥義を知らされた人として書かれています。「第三の天にまで上って、人が見てはならないものを見た」と2節に書かれていますけれども、読んでいただいたらお分かりのように、これは実はパウロ本人のことです。ですから、パウロという人は、われわれが知らない神様の深い奥義を知らされていて、その奥義を一人占めすることなく書簡という形で多くのキリスト者に伝えたのだと理解できます。

しかしここからがまた注目すべき事柄です。そんなにすごい事を知っている、知らされているから、誇りたくなります。パウロには人知れずやはり自負という誇りがあったと思うのです。しかし、どうでしょう。5節に書かれているように、むしろ弱さを積極的に誇ろうと記されています。でもなんと謙虚な人だろうとパウロを讃えるには及ばないと思います。何故なら、彼が思い上がることがないようにちゃんと備えてくださっていたのは、神様だからです。7節にある「思い上がらないように、わたしを痛めつけるため

に、サタンから送られた使い」ということについては、具体的には何のことが分かりませんが、何か肉体的な病であったり、てんかんというようなものだったと言われていきます。あのパウロという人も、いずれにしても人知れず人間的な弱さを抱えて、そうですね、苦しみを負っていたわけですから。それは何故かと言いますと、繰り返しになりますけれども、思い上がって一人よがりになって自分を誇るということがないためです。

9節の言葉が素晴らしいです。「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ、十分に発揮されるのだ」。私は、2度ばかり関西学院大学からイギリスのケンブリッジという所に留学させていただき、個人的にも何度も滞っていますが、ケンブリッジで通っていた教会で使っていた聖書が、*Reformed Revised Bible* というバージョンです。それを今でもよく読むのですが、この同じ9節の言葉がこう記されています。“My grace,” grace というのは神様の恵みとか、慈愛ということです。“My grace is all you need, for my power is greatest when you are weak.” 前半をもう1度言うと“My grace is all you need” 私の恵み、憐みがあなたの必要の全てであるということです。この言葉を聞くと、何か緊張して力んでいた肩の力がフッと抜けるような思いがいたします。聖書は告げています。私たちが生きていく希望の根拠、それはもちろん私たちも努力をしないといけないのですが、私たちの必死の意志の力、努力ではなくて、むしろ神様の恵み、その万全の憐みの故であると。パウロを通してそのことをあらためて知らされます。

点灯されたクリスマスツリーを目にされて

どうでしょう、何か張りつめていた心が柔らかく一瞬のうちに解かされるような気がしませんか。クリスマスにその独り子を世に送ってくださって、一人一人を、まとめて人類をというのではなくて、むしろ一人一人をその愛で満たしてくださる神様の大きな愛・恵みを覚える時、緊張が解きほぐされて新たな希

望が生まれます。

先ほどのショーシャンクの話に戻りますが、レッドがアンディーに信頼し、その言葉に希望を託したように、パウロに述べられた神様の言葉に、希望を託しクリスマスを迎えたいと思います。

(社会学部教授)